第 21 回　石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ　骨子

日時：平成 31 年 2 月 25 日（月）13：30～15：30
場所：札幌開発建設部 4 階 1 号会議室

写真：ワークショップの様子

◆ワークショップの内容

・第 2 回中間評価について
・平成 30 年度調査結果の報告
・今後の利活用に向けて
・その他

◆主な意見

・自然環境評価で「目標種の 5 割を確認」とあるが具体的数字で表現したほうがいい。
・それなりに自然が再生されてきていることをもう少し上手く表現できないか。
・魚類相は、洪水が何回起きるかで変わる。洪水撹乱で環境が変わることを念頭に置きたい。
・鳥類は、環境がどんどん変わって、目標種はいないが他の種はいるという状況だ。
・目標種を維持するには撹乱場所を作り続けることだがそれがいい事かどうかわからない。
・流域に湿地草原環境がほとんどないのは、洪水対策で人間が環境を変えたからだ。そのために追いやられた種を守ることは、人間の力でやらなければならない部分である。
・次年度以降、地域の協力を得ながら水際等での撹乱作業をしていきたい。
・自然再生の知見がない状況でこの事業は始まったので想定通りでなければいけないという訳ではない。予算が少ない状況で新たな目標を考えていく必要がある。
・自然環境も 10 年経過してある程度の成果が出ているということを中間評価の結論としたい。
・自然再生地なので牧草利用の草刈りも、鳥類に配慮したものにしていくべき。
・魚類調査で複数の貴重種が確認されたので自然再生という意味では良い方向かもしれない。
・自然が戻ったといっても植生が増えすぎると、トンボにはいい環境にならない場合がある。
・前回ワークショップで「里山的な利用」が基本方針になった。環境を守りながら利活用を進めていく。
・あまり人工的な場にならず、地域が上手く自然を利用していくのがいい。
・今年はゲートを開放する試験を行う。ゴミ投棄等がないか見たい。
・再生状況が見えてきた段階で、もう 1 回ゾーン分けや評価基準の作り直しを考えた方が良いかもしれ

ない。
・地域住民をもっと取り込んで利活用をするべきだ。
・自然再生は非常に良い成果があった。再生された自然を活用する方向で知恵を出したい。

◆ワークショップ配布資料

・議事次第
・中間評価結果
・各委員調査結果
・平成 30 年度利活用の状況
・今後の利活用に向けて
・中間評価参考資料
・リーフレット、トペの会の提案

＜第 2 回中間報告について：主な意見＞

・自然環境評価について、「目標種の 5 割を確認」とあるが、具体的数字のほうがいい。
・目標種が再生したい種をすべて網羅していない。数字表現で計画時と整合ができるのか。
・目標種は自然再生していけば、これらの種は出るだろうという最低線だった。
・環境は絶えず変化しそれに対応して生き物が入る。5 割という数字は残念だがすごい種も入っているのでそれは評価できる。
・計画段階では、それらの種が目標になっていないのだから、環境の変化に対する見通しが甘かったかもしれない。
・魚類は、洪水が何回起きるかで変わる。洪水撹乱で環境が変わることを念頭に置きたい。
・鳥類は、環境が変わって、目標種はいなくなったが他の種はいるという状況だ。
・目標種を維持するには撹乱場所を作り続けることだが、それがいい事かどうかわからない。
・石狩川流域には洪水対策の結果、湿地草原環境がほとんどなくなった。そのために追いやられた種を守ることは、人間の力でやらなければならない部分である。
・それなりに自然が再生されてきていることをもう少し上手い表現で示したい。
・最近 2 年は、高水敷が冠水することがあり湖沼の水位も高いので様子が違う。
・湿地がなくなり水も増え樹木も増えるという状況で、当初の環境に戻すことは不可能かと思う。個別環境への対応は、当初の環境を維持するのか、または成り行きに任せつつ何かしていくのかだ。
・昨年の地震で予定の撹乱作業が十分にできていない。次年度以降、地域協力を得ながら作業していきい。
・上流湿地は湿地としての水位を保つなら水を相当抜かなくてはならない。水位も高く、草本も伸びた。これを撹乱で元に戻すには莫大なエネルギーが必要だ。
・自然再生の知見がない状況でこの事業は始まった。想定した通りでなければいけないという訳ではない。予算が少ない状況で新たな目標を考えていく必要がある。
・人為的なヤナギ伐採をイベントとして行い、環境の維持管理につなげたい。

・農業分野では補助制度を使い市民が草刈をしている事例がある。同様に河川分野でも利用できる制度がある。
・市民、団体を個別に動かすのではなく、活動をコーデイネートとする組織を作ればいい。
・環境が変化し人も変化する。それをまとめるといい教材になる。それをここで学ぶことが重要だ。
・川で人為的に何かすれば、必ずヤナギが生えるのは水の力を無視しているからだ。それを学ぶ場は必要だ。
・再生地は大規模で国としても継続的に動かすための仕組みがない。その仕組みづくりには予算も人も必要だ。
・市民にできることはある。それを少しの予算で支援すればいい。
・自然環境も 10 年経過してある程度の成果がでているということを結論としたい。

＜平成 30 年度調査結果の報告＞

水位、水質、底質調査結果について

・水位と積雪量の関係は、融雪量の影響なので、わかりやすい表現に変えたい。
・P-9 は、水位が右上がりで水も抜けにくくなっているのではないのか。
・湖沼に腐泥が溜まり目詰まりを起こしているかもしれない。
・魚類は、冬の出水では移動しないが、夏だと相当な移動がある。冬や春先の出水では土砂が流れ込むので逆に植物等に変化を与える。
・データ見ると初めに想定した水位とは違ってきている。
・想定と違うことがあるのでデータをとって行いくことが重要だ。予算に配慮しつつ基本データはとっておきたい。今の段階で結論はでないのでこの結果は受け入れるしかない。
・水位計等を立てておき、再生地に行った人が日時、水位等を記録すればいい。

＜各委員の調査報告＞

鳥類調査 1 について

・今年度は、シギ類が一度確認されただけで、あとは確認できなかった。
・前年春に多く確認されたのは、湿地がまだあったからだろう。今年は上流湿地も全部水で埋まり、サギ類も下りられない深さになった。餌の魚が少なくなった可能性もある。

鳥類調査 2 について

・8 月調査時、ノゴマの巣立ち雛が確認され、ホオアカが繁殖中だった。右岸堤防は草原性鳥類の繁殖場所になっている。
・堤防除草の時期をずらしてもらっていたが、今年は除草されていた。刈られてしまうと繁殖に影響がある。
・農家にとって草原や草藪は、虫や鳥を呼ぶもので好ましくは思っていない。
・当別町や江別市の人からハクチョウやマガンが来たら困るといわれ、データを示して被害の心配はないと説明したことがある。
・地域の農家とは話をしているが時間がかかる。マガンは増えているので上手く地域の人を巻き込んでいきたい。

・再生地はヤナギの樹林化で、草原性鳥類は減っている。堤防法面の方が利用率は高いし種数も多い。
・自然再生地なので牧草利用の草刈りも、鳥類に配慮したものにしていきたい。
・堤防は撹乱を起こして草原を維持している。採草して鳥も保全できるのが一番いい。
・巣がある場所にポールを立て、そこを囲み、周囲は自由に刈れるようにする方法がある。

魚類調査

・ワンドの水当たり部には、カワヤツメが入った。ハゼ等海と関連する種も確認できた。
・砂州は、当別川の水が入り、カワヤツメ等の魚が集中している。ガマが繁茂する場所はコイ類の産卵場である。
・石狩川ではカワヤツメ幼生の生育場所が減少しているが砂州では非常に多くなっている。
・P-2 は、氾濫時にトゲウオ類、ウグイ属、貴重種のエゾホトケドジョウが入り、増えている。
・6 湖沼はヒシ、ガマ、ヨシで覆われ、富栄養化のためか魚が少ない。氾濫時にドジョウや貴重種ヤチウグイが入った。カムルチーは P-3 から入った。
・P-3 も氾濫時にワカサギ、ウグイ類が入りエゾホトケドジョウとカムルチーも確認された。
・P-9 でもカムルチーが再生産しておりヤチウグイ、イバラトミヨ、ジュズカケハゼがいた。トウヨシノボリは、湖沼で生活する魚ではなく氾濫で入った。
・コイ科が非常に多いのは、止水性水域の特徴である。また海と川を往来するハゼ科が多い。
・幾つかの貴重種が確認されたので自然再生という意味では良い方向かもしれない。
・カムルチーは駆除対象（特定外来生物）ではないので生態系への影響はあまりないのかもしれない。
・P-6～8 は未調査だが魚はたくさんいると思う。
・前年は上流湿地を横断できたが、今年は水位上昇で大変だった。

トンボ調査

・6 湖沼で増えたガマが枯れてしまったのは、アレロパシーのような作用かもしれない。
・Ｐ9 は、工事後 5～6 年はヤンマ類が増えたが、最近水位が上がりヤンマ類も棲めない。
・環境の多様度指数（多様な種が棲める環境を測る指数）で見ると 6 湖沼は安定していて、Ｐ9 は当初低かったのが急に上がった。今は 6 湖沼の少し下位のレベルだ。
・優占種で比較するとＰ9 は当初 1 種だったが 5 年目以降は増えた。6 湖沼は 14 年目から急激に多様性が上がったようだ。
・トンボによって好む植物が違うが、その植物が増えすぎると逆に利用しないようだ。
・P-9 と 6 湖沼のデータを比較すると、6 湖沼の変遷を P-9 が追いかけているようだ。6 湖沼が P-9 の未来予想図になる。

樹木調査（植樹活動）

・樹木は、10 年～20 年放置してもヤナギとニセアカシアぐらいしか生えてこない。
・再生地の植樹は、遺伝的に問題がないように北海道の河畔林を構成する種を選んでいる。今年度は市民団体、小学校等、3 回植樹した。
・利活用の試みとして、在来馬を使ったホーストレッキングを実施した。

＜今後の利活用について＞

・地元がこの再生地区をどう意識して利用に繋がって来たかを評価していくべきだ。

・再生地区には自動車で乗り入れできるのか、できないのかという点を明確にしたい。
・地域住民をもっと取り込み利活用をするべきだ。ワークショップでその議論をしたい。
・要望を聞くことは大切だが、地域に聞くと利活用が前面に出すぎることがあり、難しいところである。
・10 年経過し自然が再生しつつある。あまり人工的な場でなく、自然を地域が上手く利用していくのがいい。
・今年は 1 カ月間程度ゲートを開放してゴミ投棄等の様子を見たい。
・再生地区のＰＲ用リーフレットは誰を対象にするのか明確にして文章を統一してほしい。
・前回ワークショップで「里山的な利用」が基本方針になった。環境を守りながら利活用を進めていく。
・地域住民の考え方を反映するため、地域が参加する再生地の勉強会を再開してはどうか。
・利活用については、あらかじめゾーン分けをしてルールを決めておきたい。
・再生地を禁猟区にするという議論を引き続き行いたい。
・地元ＮＰＯと町内会で禁猟区申請を出すという合意はある。
・地元の市民団体がエゾノウワミズザクラの植樹を計画している。
・再生地の環境がどうなるか、計画当初は予想がつかなかったが、再生状況が見えてきた段階でもう 1 回ゾーン分けや評価基準の作り直しを考えた方が良いかもしれない。
・自然再生は非常に良い成果があった。再生された自然を活用する方向で知恵を出したい。

＜次年度のワークショップについて＞

・ゲート開放は、皆様の意見を聞きつつ了承を得てから実施する。
・来年度のワークショップは、人為的撹乱のガイドラインや今後のワークショップの在り方等について、議論していきたい。